

# 天保の深川庶民、市井の話題と流行

天保年間(1830~1843)。天保は資料館展示室に展開する庶民の町と同時期にあたります。この頃人々はどのような話題・流行の中で暮らしていたのでしょうか。展示室の町並から広がる天保の世相を、当時の市井の話題から探ってみましょう。

## 1. 天保のベストセラーと深川

### (1) 執筆歴61年・その数480種—滝沢馬琴—

馬琴は深川海辺橋東側の、旗本松平信成屋敷内(現・平野1-7・8付近)で明和4年(1767)に生まれました。父は松平家の用人を勤め、馬琴9歳の時に死去。父の跡を継ぎ奉公をしますが、苦しい生活に耐えかね14歳で放浪生活をはじめます。幼い頃から俳諧に親しんだ馬琴は、文学の道を志すべく、寛政2年(1790)戯作界の第一人者山東京伝を訪ねます。

深川の質屋生まれの京伝は同郷の馬琴と意気投

合し、馬琴を門人にします。翌3年馬琴は深川に戻り仲町の裏長屋に住み、この年永代寺の開帳で評判だった壬生狂言を主題にした黄表紙「廿日余四十両尽用而



滝沢馬琴(歌川国貞画)

二分狂言」を執筆。その後読本(絵草紙に対し、文章が主)に進出し、鎮西八郎為朝を主人公にした「椿説弓張月」(文化3年・1806刊)で名声を確立しました。続いて、下総里見家の興隆と8人の勇士を描く「南総里見八犬伝」(文化11年・1814~天保13年・1842刊)が大好評となり、高価な読本にもかかわらず500部を出版しました。貸本屋を通し、読者を広げ、多額の原稿料を得て、師の京伝に続き当時稀な職業作家の地位を築いていきました。

### (2) 絵草紙挿し絵・人気浮世絵師—歌川国貞—



『修紫田舎源氏』柳亭種彦作・歌川国貞画

戯作本は頁の半分をしめる挿し絵の効果が大きく、板元や作家はどの浮世絵師を選ぶかが大きな問題でした。

国貞は天明6年(1786)生まれ。15歳の頃、役者絵と戯作の挿し絵で活躍していた、初代歌川豊国に入門しました。国貞は本所五つ目付近(堅川の五之橋)に住み、渡し船の株をもっていたため、「五渡亭国貞」と称しました。文化4年(1807)22歳の時、馬琴作・草双紙「不老門化粧落水」の挿し絵でデビュー。絵師に特にうさかった馬琴が国貞を選んだことから、その力量がうかがえます。

柳亭種彦とのコンビで刊行した人情本「修紫田舎源氏」(文化12年・1829~天保13年・1842)は源氏物語を素材にしていますが、当時から11代将軍徳川家斉の大奥での生活を描いたものと信じられ、各編1万部以上の売れ行きとなり江戸時代を代表するベストセラーになりました。愛読者は大奥の女中から裏長屋の娘までと幅広く、近代大衆小説の起点となりました。

### (3) 深川の日常風景—「春色梅児誉美」—

為永春水作「春色梅児誉美」(天保3年・1832刊)は富岡八幡宮周辺の色街を舞台に、丹次郎をめぐる深川芸者米八と仇吉の恋のかけ引きを描いています。作中から深川芸者の独特の言葉、人気芸者の評判や衣装の好み、さらに町の様子、路地を行く物売りの声など、深川の流行と市井の人々の心意気を生き活きと今に伝えています。

## 2. 天保期市井の話題あれこれ

巷に広がっていた庶民の話題を、<sup>のこ</sup>遺された史料の中からみてみましょう。

### 《墓石の怪》(天保元年・夏)

何者かが寺院に入り、ひそかに墓石を磨き、戒名に朱色を差す事件が起こる。程なくしてやんだ。

### 《鼠小僧次郎吉(37歳)捕まる!》(天保3年8月)

次郎吉は16歳の時、建具職で独立。しかし博打好きで深川辺を遊び廻り、武家屋敷中心に泥棒を働くようになった。幕府老中・若年寄の屋敷をはじめ侵入した家は120、金額およそ3,000両。次郎吉曰く、「武家屋敷は外見は厳しいが、中に入ると警戒が緩い。町家は戸締まり用心が行き届き、入りにくい」

### 《まぐろ鮨はじまる》(天保3年11月間)

この年2、3月頃から<sup>まぐろ</sup>鮨が大量に獲れた。始末に困り、鮨のネタに使うようになる。

### 《本所深川辺の町人住居増える》(天保5年)

江戸市中の度々の大火を恐れ、裏長屋の人々まで江戸郊外へ仮住居したまま戻らない。本所深川辺は舟の便がいいため、寺社・百姓地の隔てなく町人の住居となっている。

### 《流行言葉“おっこち”》(天保9年)

10月16日朝、浅草御厩河岸の渡し舟が突風に<sup>あお</sup>煽られ<sup>てんぷく</sup>転覆。この日は向島秋葉社の祭りで、火伏せの御守りを貰いに行く人々で、舟はいっぱいだったため死者や行方不明者がでた。いつも少しの危険も感じない渡し舟だけに、江戸中がびっくり! この驚きが“おっこち”という流行言葉になり、恋人や恋愛のことを盛んに“おっこち”といった。

### 《お万が鮎》(天保10年)

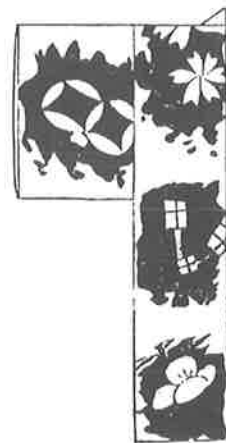
へ可愛いけりゃこそ神田から通う と唄い、滑稽な身振りで踊る、お万が鮎が話題。中村座春狂言の「岩井歌曾我対面」で、お万が鮎を取り上げたため更に大人気となり、芸者や子どもが<sup>まね</sup>真似をした。ちなみに値段は一本四文。

### 《寒暖計の日本製造はじまる》

オランダから入ってきた寒暖計(温度計)が日本で作られるようになった。

## 3. 「守貞謄稿」にみる天保の流行風俗

「守貞謄稿」の著者、喜多川守貞は文化6年(1809)大坂生まれ。天保8年江戸へ出、深川に住んだ頃から、見聞きした庶民の身近にあるさまざまな事物を書き留めました。内容は建築・衣食住・年中行事など多方面に及びます。この中から天保の流行風俗をみてみましょう。

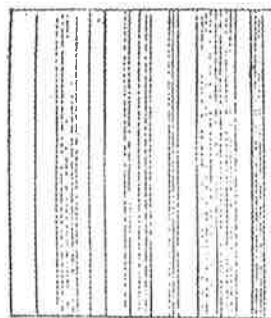


### ◆博多絞り◆

男女共に、流行。紺地に一寸(3.03cm)程の<sup>めい</sup>目結(回型)や花型を散らした、華やかな浴衣。

### ◆やたら縞◆

“やたら”とは全てに節度の無い事で江戸の俗語。この縞柄は筋の感覚が一定でないためやたら縞という。女物に流行。



### ◆手ぬぐい被り◆

頭巾の代わりに手ぬぐいを被る。被り方はさまざまだが、当時は手ぬぐいを二つ折りにし、両端を鼻に掛けて結ぶことが流行る。



### ◆武蔵野簪◆(天保11、12年頃)

竹簪に鳥の羽を付けたもの。人通りの多い場所での<sup>でみせ</sup>出見世や路上で売り歩かれた。売り歩く言葉は「深川名物、武蔵野簪」